

崇敬構のすゝめ

特43

767

東京図書館

函二二

門新

架一一

部七

號

類三

014330-000-2

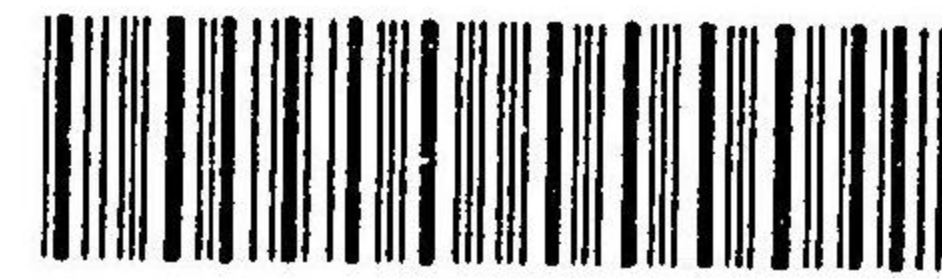
特43-767

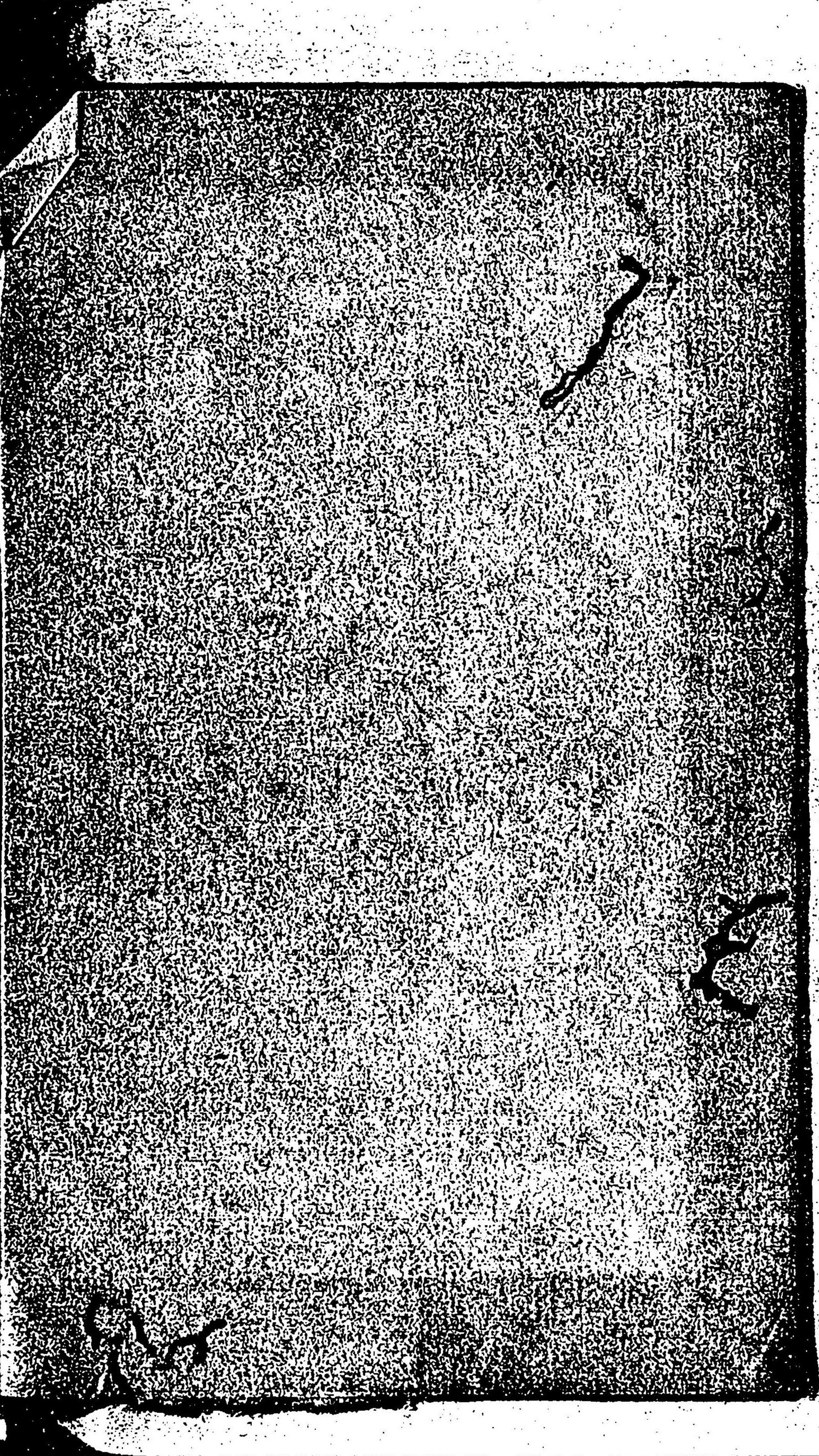
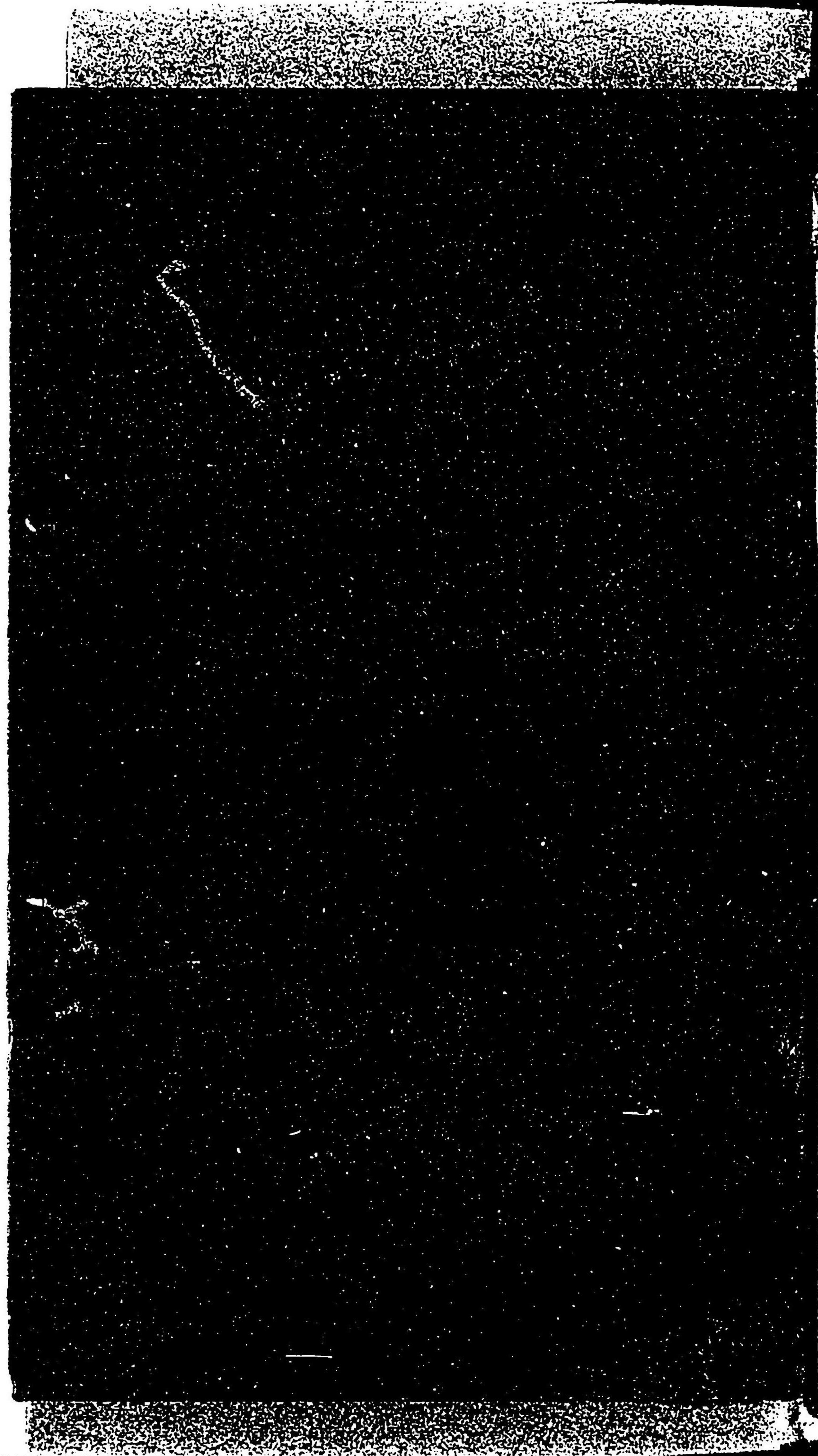
崇敬構のすゝめ

村井 晋一郎 / 編

M11

ABB-0678





編輯
村井晉一郎

明治十一年
三月廿五日御届
同年四月
出版

崇敬構の

金

志

西
山
堂

崇敬構の
勸め
内陣の
入陣の
圖

- 加入願の雛形
 - 構社規則
 - 同規約
 - 誓詞
- 右の構者の須知必用
のことなれば全文を掲
げ之を書中に挿入す



特43
767

崇敬構のすゝめ

先づ伊勢、出雲、金刀比羅の三大社に於て世人の三條教憲の旨に暗く外教岐々乎として延蔓する折柄或は方向を誤り邪路を踏み迷ひ聖代の罪人たらんことを深く歎かれつ、遂に一の構社を設立し伊勢兩宮又て神風構といひ出雲大社又て八雲構と名づけ金刀比羅宮にて崇敬構と稱す乃はち此構の發起なりと抑も金刀比羅宮の神力妙用のいちじるしき此日の本をわろの支那人もかつての神助を蒙ることありとかやかの信者が寒天と裸參を辛抱し又は難風に出逢ひ髪を切り或は酒を絶ち女を遠くおなど荷も心を傾け祈ることあるときは靈驗矢より疾く若し違亂をせば直前神罰を蒙る鉄炮よりとやし然る故に年々歳々遠く奥羽三越或は九州地方の邊鄙より參拜師伏する者ひきまさらぞ分て此構社の設立あるより荷も加入の者は昇殿を免し小守等一人毎に授與せられ若し生涯の御勤りに追ふことあらば金鼓

を貸渡し活路を求め或は旅中路金の乏さも差支なく定宿へ宿泊せしめ又ハ孤子を養育させ學に就き身を立つる基をなさしむるなど慈惠の厚き實に譬んかたなけれと貧賤貧富の差別なく此おん神に心をよする仁はことごとく此社に加入するごと、なり一層信仰の念深く日増入社の数もしげく最早二千餘組も願ひいで加入人別幾万人といふに至れりと構中五拾名を一組となし之を小の某組といひ市街郡村の内小の幾十組を纏め之を大の某組といふ皆名稱を異にす組内は番號を以て之を區別し某組第幾號といふ小の組は世話人を設け大の組に社長を置く今その入社願の手續より社中の規則を始め内陣入の次第に至るまで荒増爰に書きまゐるし崇敬構のすゝめと名づく

おより此社に加入せんと欲する者ハ左の雛形の如く願書を認め總代人より最寄の社長を経て本宮へ願ひ又社中協議して世話人を撰舉し同き願ひ立つべし

願

一今般崇敬構社御設立之由奉拜承候處私共年來 御本宮ニ信仰仕談ニ付御規則之儀嚴重ニ相守可申候間何卒御構内ニ加入御許可被爲下候得者社中一統難有仕合ニ奉存候此段奉願上候也

社中總代 且此總代ハ世話人
ヲ出スヘシ

何ノ某印
何ノ某印

年 號 月 日

金刀比羅宮

御構社係御中

何國何郡何村何番地

戸主 何ノ某印

當何ヶ年

妻 誰

同何ヶ年

長男 誰 同何ケ年
二男 誰 同何ケ年
父 誰 同何ケ年
母 誰 同何ケ年
何人内 男何人 女何人
何百番地 某印
妻 誰 同何ケ年
長男 誰 同何ケ年

願

二女 誰 同何ケ年
何人内 男何人 女何人
戸何拾何軒
人員何百人

右之者御擣社世話係御許可被爲下候得者社中一統歸伏仕難有仕合奉存候此段
奉願上候也

社中總代 但此總代ハ世話人ノ外可然人ヲ出スヘシ

年號月日
何ノ某印
何ノ某印

金刀比羅宮

御構社係御中

わくて本宮よりろの書面を許可し此地の定宿より何組第何組の某月某日参宮すべ
 き旨を傳ふ乃ち世話人にて一組の姓名を委しくまらへ前廣之を定宿に報す既に定
 宿も報せし仁は是非参宮すべし決して代人を立つるを許さず定宿の店前に必き目
 印の職をたて某組第幾號と大書すさて加入者案内を得てそれく到着すれば其日
 の午前十時世話人及び總代人羽織袴を着し恭しく引連れ登山きて教殿より上る乃
 ち教導の係あり敬神愛國、天理人道、奉戴皇上、遵奉朝旨等の義を説き孝子貞婦等
 の話をなし詳し規則書の趣意を演述す明辨流る、如く満堂の聴衆感涙に袖を絞り
 ける此日の銘々帳面は記名調印して退く

構社規則

第一條 御教憲三條ノ旨ヲ守ルヘキ事

三條トハ敬神愛國

明天理人道 奉戴皇上 遵守 朝旨

第二條 吾カ國教ノ外謂レナキ教ニ惑フマシキコト

第三條 入構社ノ節授與ノ守札オヨヒ構社札ハ本人生涯ソノ身ヲ放テス理墾及

ヒ入厠等スヘテ不潔ノ場ニ至ランニハ必ス之ヲ持ツヘカラス以テ構社ノ證ト

爲可ク

但シ構社札ハ本人死去ノ後本宮構社係ニカヘモ境内靈魂社中ニ納メテ春秋ニ

祭祀ヲ爲シ又自家靈舎齋モ隨意トス

第四條 本宮御祭日 毎月一日十日廿六日ハ月次祭 六月十日八月廿六日九月十

日ハ小祭二月祈年祭十一月廿三日ハ新嘗祭特ニ拜禮有ヘキコト

第五條 毎年十月九日十日十一日ハ本宮御大祭ナリ

崇敬構のすゝめ

各戸ニ祝儀ヲ表シテ家業ヲ休憩シ以上隨意トス

但シ本日ノ業豫メ之ヲ願ヘシ怠惰ニ流ルヘカラス

夜ニ至テ神燈ヲ上スヘキ

第六條 構社中ノ者本宮へ参詣アラハ一年一度昇殿拜差免スヘキ

第七條 一社ニ關係ノ事件ハ自己ノ裁斷ヲ許サス凡テ協議ヲ盡ス必ス本宮ノ指

揮ヲ期ツヘキ

第八條 社長及ヒ世話係等ノ指令背クマシキ事

第九條 構社ハ和順ヲ本トシ互ニ過失ヲ正シテ懇親同胞ノ如クナルヘキ

第十條 社長互ニ往來シテ諸事斟酌シ且他ノ構社ニ對シテ疎心有マシキ

第十一條 社長世話係ノ敬神篤實容儀端正ノ者ヲ撰フヘキ

第十二條 訴訟及ヒ爭論等ハ構社ノ耻辱ナルヲ以テ互ニ之ヲ和解シ凡テ地方官

ヲ煩スマシキ

第十三條 毎歲兩度 三月十日 構社中家内安全子孫繁榮ノ爲本宮ニ於テ八少女

神樂執行之事

第十四條 構社中神式祭ニ改ル者其段本宮へ達セヨ則チ祖先ノ靈主トシテ神鏡

一面並 拜詞畧一帖之ヲ授クヘキ事

第十五條 構社中ノ孝子貞女或ハ鰥寡孤獨及ヒ災難等ニテ頗ル窮薄スル者ハ社

長五名以上ノ連署ヲ以テ本宮構社係ニ達セヨ則チ或ハ適宜ノ賞救ヲ行ヒ又ハ

金穀ヲ貸スヘシ其利子ノ如キハ總テ之ヲ年賦ニ納ム可キ事

第十六條 構社中ノ者貧困ニシテ育兒ノ術ナクハ前條ノ如ク本宮構社係ニ達セ

ヨ則チ之ヲ育養スヘシ其兒子成長ノ性質ニ率ヒ志願ノ學ニ就カシメ業成ルニ至

ラハ各自ノ所長ヲ以テ數年ノ神恩ヲ謝ス可キ事

第十七條 老幼婦女及ヒ遠國ノ者擧社加入ヲ欲セハ其旨便地ノ社長ニ達シ誓詞ヲ奉シテ遙拜セヨ社長之ヲ本宮傳社係ニ送ラハ第三條ノ如ク致ス可キ事

第十八條 質素ニシテ勉勵スルハ家福生活ノ本即天神ニ報ハル所以ナレハ未モ怠情有ヘカラス驕奢ニシテ怠ラス破産不幸ノ根シ邪鬼ニ魅レラル、始メナレハ須臾モ忘ルマシキコト

社中規約

一 御本宮御構社御規則第一 御教意ヲ始メ十七ヶ條堅ク相守可キ候事

一 御大祭或ハ御中祭等之節ニケ年一度構社中ニ於テ人員ヲ定メ參宮仕御神恩ノ万分一ヲ報シ奉ルヘキ事

一 毎年一度ツ、社中參宮ノ節隨意ヲ以テ御饌料献納致シ且社中貧困ノ者出來候ハ救助可致事

一 構社中平日相互ニ睦ク致シ候者勿論若シ親族無之困窮之者死去等之節世話係或ハ社中ヨリ兼テ深切ノ者撰置厚ク世話可致事

一 社中集會等ノ節ハ都テ質素ヲ本トシテ無謂ノ飲食等有間シク事

その翌日昇殿の式を執行せらるる之を内陣入といふ五十名の組合を一ト仕切とす午前六時を期し各々本殿に參る神官二名前の廊下に立ち白幣と神木を執り人別に之を祓ひ之をさよめ然る後ち一人ごと姓名を呼び引内陣に導く既にして壇上扉開け箔上る前面白き幕を張り中央に一大神鏡を奉安す莊嚴云のんかたなく心中自かから敬肅するを覺ふ是に於て入陣の者進んで壇下に拜伏し誓をなす一人の神官神酒を賜ひ一人の小守及び擧社札を授く尤もりの者の志に任せ多量の神饌料を納む又戸主の門札を授く

誓詞

此乃 遠國より遙拜して此誓をする時は以上の
 二字を削り續岐國の三字を加へ
 琴平山乃底津巖根爾大柱太敷立高天原爾千木高知
 鎮 坐須掛卷母畏支
 二柱乃大神乃字豆乃御前爾何國何郡何里爾住居留何某
 慎美敬比恐美恐美毛誓比白佐久
 大神乃高久貴支御恩願乎被良牟止常毛常七敬比慕比奉
 里在乎今志往水乃清支河瀬爾自蘇被志
 大神乎崇 敬 擣 社中爾加入奴故其御規則爾毫 背支
 不奉止燒太刀乃敏心振起志 誓比申須事乃由乎眞澄鏡
 如須大御心爾至久安久聞看給比 今毛往前志某我道理
 爾叶波牟祈事方祈乃盡 伊豆乃御靈乎幸信給比又此乃

現世乎罷良牟後毛魂波御定乃麻爾麻爾産土神等乃神議
 依 大神乃御許 參里令奉仕給及止祈白サ久乎
 是乃誓詞爾遠 御規則乎犯背事乃有牟爾方
 大神乃巖支御稜威以 立 神罰米罰米神逐比逐比給
 及刀鹿自物膝折伏鶴自物頭根突抜 恐美恐美毛白須
 小守の其者の安全幸福を祈念せるものにて擣社し此れ加入したる證據物なり
 何人よても擣社札さへ所持すれば何れの國よに困窮するも此擣社の定宿に立ち寄
 り勝手に宿泊をなし又構中にて互に相扶助して相救恤をべし
 又此社加入する者のため一ケ年兩度社頭よ於て祈禱あり 參詣なせしとさき一
 ケ年一度内陣よて參拜をゆるさる

明治十一年三月廿五日御届
同年四月出版

愛媛縣下段岐國第四大區一小區
高松西新通町百四番地寄留

編輯人 平民 村井晋一郎

印刷 磗崎高松東公民社

定價金四錢

